

ひとり歌

さの子

藍色を流して光る大空の秋もなかは生きの甲斐あり
君が歌ふ淋しき歌の波の上にひびきて秋の海更けにけり
夕闇にさまよひて歌ふ吾の聲涙となりて皆さげよかし
幾年を求め求めてこの年も歎きの秋の又一つゆく
飯桐の實のあかあかとなり下る頃なり秋のひそやかにゆく
血の色に莖の輝やくもろこの夕日が丘に一人は淋し
あかあか夕日落ちゆく丘の樹に雀群れなく暮のしばしを
ひつそりこ主なき椅子の横はる夕日の室に光る金文字
組柔のかけ地に黒うして白光る月夜さなればまさるなげかひ
歌うたひあれば安しと思はれんその思ひ出の悲しきものを
淋しきの中を生きて今日も亦心の外の文字を見てあり
假初の命の中に人等みなせめぎ合ひして神を稱へず
平凡の女さなれき聞きしこ吾の心に響を立つる
夕暮の唯一色に物皆を沈めて来る寂莫の音
一人なる悲しきみをして永久に吾こそ歩め淋しき道を
江の水に月は照れども仄暗き声かけの路を君さ吾ゆく
霧罩むる秋の山邊の夕あかりふき輝きて寂莫の來る
夢のごと數多の人の動きゆく秋霧の中の夕かけの町
天地の物皆夢の如くなる霧の朝の木の葉のさやぎ
さや／＼木の葉さやぎぬ霧ふかき原の朝の薄日の中に
痛まじき裂目を見せて大樾空にたか／＼光りて居たり
若き日の物思ひなごいふ中にまた一年のゆかんとはする
ゆく年の慌しさの中にしてわれ一人なる旅の安けさ

秋空

林しづ

何せむと生れ來し身ぞかく思ひ空を仰げば涙流るゝ
霜さげてうるほひ帯べる庭の土輕き心に出でてふむ哉
こゝよりは淺間も見ゆる菜畑に霜白う降り冬は來りぬ
くるくると銀杏の木の葉まひ落ちぬ白壁にさす夕日の前に
泣き乍ら納戸の壁に身をよせし七ツの私の目に浮ぶかな
三ツ許り呼鈴押してつゝまじう支關の戸を明けにけるかな
若人の瞳の如くすつきり澄みたる空に心吸はるる
うら若き死をば願ひぬひやかに白粉匂ふ秋風の朝
梳く髪の餘りにじげく落ちかゝるその悲しさの中に秋ゆく
はなやかに君は装ひて出で行きぬ我悲しみにかはりもなく
若人の眼の色をして秋の空高くまさをく澄みて動かす
しみじみと語らふ人の涙ぐむ瞳美し秋の灯の前
誰か來てわが黒髪を斷つ如き心おびえの中に日は過ぐ
静やかに夜は更け行きぬ草の上に投げたる我手白くつめたし
祈りえぬ涙ぐまじき心もて上り來りし秋風の岡
生憎の心
三千代

手帖より

つる江

母います病室の戸をほこほこたたければやも胸さわぎする
たへがたき物淋しさの中におてしみみ空を見る夕哉
れこそかに沈みゆく日の前に立ち安らかに吾が祈さざる
文机にしめる印氣の紅が今宵は殊に我に淋しき
戸の前に眠れる猫のまるき脊に午後の光のさせる淋しさ
亡き友のひさみの如く清らかに星のまた／＼宵は嬉し
物皆を喜ぶ人と我なりぬながき心の戦を経て

山の心

せつ子

おごそかな山の心さあわたしき人の心さ打ち向ひけり
大空に星數多あり大地に吾一人あり夜は深くして
しみじみされのが心を打見れば見知らぬ人に逢ふ心地する
安らげきおのが心に何さなくたのしみ多き今日の一日
生れ來し前の心に似し我の今日の心を懐しみ思ふ
夜の底に重き聲あり何さなく己が心の聲によく似て
入相の鐘の響の後追ひて己が心も空に消えゆく
云ふも／＼聞くも聞かぬ唯一人夕の窓に眺めやる星
夜の底を流るゝ風はうら若き女のみするため息のこゝろ
くるがれの心の扉しめきて人來ぬ事を君のなげける
生れ來し前は一ツの君さ我心に同じ聲をひそめる
何物もなき暗の夜になき君の面影のみが我前に在り
我が心
てい子
我が心大空に浮く一片の白雪に似て涙ぐまじき

人の住む家と家との間より秋立ち初めし空ののぞける
いさはしき人のあまたにかこまれて旅する如き日の重なる
秋の水泣かむさしたる若人のかほげに似て光る淋しさ
秋の雨忙しや毛野へ歸らむの人々のせてゆく汽車にのる
ゆきさりの人が吸ひゆく煙草の香うすら甘くもにほふ黄昏
献げたる願は何ぞいのちさもめで來にけむを斷ちし黒髪

□体操服(運動會の時)

文一

嬉しかったんだらうか。ほこらしかったんだらうか。はづ
かかったんだらうか。私は平氣で体操服の姿を見せて了
ふ事が出来なかつた。前の人のかけにかけられる様にして、
きまりがわるいと言ひ乍ら、それでも見られまいと許り逃
げて了ひはしなかつた。やつぱり見せたかつたのだらうか
曾てはあさましいさまで言つて居た姿だつたけれど、着は
じめて四ヶ月、なれては何の感じもなくなつて居たのに、
どうしても平氣で居ることが出来なかつた。誰もが「よく
似合ひますよ」と言つた。「いよいよ本校の人になつて了
ひましたね」とも言つた。凡てに微笑をかへしたけれど、
競争に出て行く時も、カドリールをしてゐた時も、運動會
では本校の生徒のしるしである体操服を着てゐるこそ、
その姿を千葉先生にも、女學校の友達にも、見られてゐる
のだといふことを少しも忘れはしなかつた。
いつてもする様にごろりミクロンの上にあふむけにころ
がつて、空に向つて悠々手足をのびしてじつと目を閉ぢ
た私を、驚いて見て居た人があつた。おきあがつて笑つた
ら女學校の飯田さんが笑つて立つて居た。